

海外レポート

◆
武石 彰

京都大学大学院経済学研究科教授

EHESS でのサバティカル

一昨年(2015)の10月から9か月ほどパリで過ごした。

授業や業務などからしばらく離れ、長く滞っていた幾つかの原稿を書き進めたいと考え、勤務先にサバティカルを申請し、許可を得た。米国に行くという選択肢も検討したが、幾つかの事情と理由からパリを選んだ。

滞在先は、フランス国立社会科学高等研究院(EHESS)の日仏財団(FFJ)であった。FFJは社会科学分野における日仏の研究交流を目的としており、客員研究員として受け入れていただいた。

「花の都」で過ごした時間はしかし、地味で静かなものとなった。一緒に連れて行った二人の子供が小さかったため、いろいろな公園に足を運ぶ機会は多くあっても(それ自体は素晴らしい経験だった)、美術館を訪ねたり、カフェやレストランで食事をしたりする機会は少なかった。加えて、滞在を始めてひと月あまり経ったところでパリ同時多発テロがあり、以降、人が集まる場所に行くことを控えるようになった。仕事の面でも大半の時間をオフィスで原稿を書くことに費やした。

というわけで、今回の経験からフランス、パリについて語れることはあまりないのだが、この「海外レポート」に寄稿させていただき以上そうもいってられない。パリ滞在中を通じて感じたことを記して残りのス

ペースを埋めることをお許ししたい。

テロ、社会科学、パリ

2015年11月13日夜のパリ同時多発テロが起きた場所の一つは、わずか2日前に家族で観に行ったサカスの会場のすぐ近くであった。同じ区域に住んでいたFFJの客員研究員の一人は、銃声を耳にし、窓の下は治安当局の拠点の一つとなり、一晩中サイレンと騒音が絶えなかったと後から教えてくれた。私が住んでいたところはテロが起きたいずれの場所からも距離があったが、感覚的には「目と鼻の先」のできごとであった。翌土曜日の朝、パンを買いに外に出た時には緊張感を覚えた。通りに人影は少なく、冷たく張り詰めた空気が漂っていた。その後、時間の経過とともに緊張感は次第に薄れていったものの、決して消えることはなかった——それが、所詮は一時滞在者としての限られた緊張感であったにしても。

その緊張感の中で、なぜこのようなことが起きたのかを否応なく考えさせられた。

戦後、フランスがドイツなどと協力しながら欧州の復活に向けて統合化に突き進んできた過程の中で、テロを誘発するような要素が醸成されていったのだろう。世界における政治的、経済的主導権を競い、資本主義の原理に沿って邁進してきたことが、その後で取り残されてきた諸問

題を深刻なレベルにまで膨張させ、そのような問題についてフランスも、欧州も、米国も、そして日本も世界も、よく考えなくてはいけない局面を迎えているのだろう。専門外のことはあるが、そう考えた。

とすれば、社会科学は大きな問題を突きつけられていることになる。この問題は、現代の社会科学で進行する「専門化」「細分化」「高度化」では扱いきれない。社会科学、より広くは人文社会科学を構成する諸分野を総動員する必要がある。私が専門とする経営学もその一端を担う。経営学は原則として平和を前提とする学問である。非常事態において経営学に語れることは限られている。だがそれは、経営学が社会全体を揺るがす問題に関われないということの意味するわけではない。社会全体の問題について経営学として何をどう分析し、議論すべきかを検討することが求められているということの意味する。現代社会で重要な役割を担い、様々な問題に関わる企業や組織を扱う経営学として、社会科学の他の領域と連携しながら、社会全体の問題について理解し、考えていかなければならない。

テロをきっかけにこう考えるようになったが、それはまた、その頃(たまたま)読んでいた本に触発されたものでもあった。

ちょうどパリ滞在中の前半に取り組んでいた原稿のために、シュンペーターとドラッカーが論じたことを振

り返る作業をしていた。詳細は省くが、二人とも資本主義社会においてイノベーションを生み出していく企業の役割を高く評価しつつも、そこに内在する社会全体にとっての問題点を同時に論じていた。その問題点について考えることなしには、企業が企業としての成果を出している、企業経営、資本主義の正当性が根底から揺らぐことになる、というのが二人の見立てであった。社会主義、全体主義が勢力を増し、世界が二度目の大戦に向かっていった時代に身を置いた二人が論じたことは、その後も色あせることなく、いやむしろ今になって、パリで、世界でテロが続発し、欧州の(その後米国でも)政治の先行きが不透明になる中で、鮮やかさを再び増しているように思われた。二人の議論は社会科学の特定個別領域の狭い議論にとどまることなく、広く人文社会科学全体から社会を見ていこうとする姿勢の中で組み立てられている。シュンペーターが「社会経済学」と呼び、ドラッカーが「社会生態論」と呼んだそういう姿勢こそが、その「肩の上」に乗って社会を遠く、広く見通していくための社会科学の礎を築くことを可能にした。

社会科学が大きな構えで現実の問題に接近していくことの大切さは、さらにまた、パリ滞在中に見聞きしたことによって認識させられたものでもあった。

滞在先のEHESSは、人文社会科学を構成する多様な専門分野、研究者を結集し、相互交流に努め、歴史や文化の多元性にも着目しながら、社会の問題を解明し、考察していくことを目的とする研究機関であった。所属した研究者のリストをながめると、例えば、レヴィ=ストロース、デリダ、ブルデューといった名前が出てくる。先ごろ話題をさら

たビケティもEHESSのメンバーの一人である。いずれの研究者も大きな構えで社会を捉えようとする精神において顕著である。社会科学系では欧州最大級の博士課程の学生を抱えているEHESSが、研究においても教育においても学際的な接近方法を促し支えるために重視しているのが、様々な領域で開催される多様なセミナーに分野を越えて研究者、学生が参加することであった。私がセミナーで発表した際にも、普段の学会などでは受けたことのない社会的な観点からの質問を受け、戸惑いつつも、新鮮な刺激を得た。

EHESSの外に出ても、パリは社会科学への関心が強い都市であった。EHESS本部の近くにあるフランス国立図書館の辺りまで歩くと、セヌ川に沿う同図書館を両脇ではさむ二つの小道は「エミール・デュルケム通り」「レイモン・アロン通り」と名付けられていた。パリの通りは様々な人物の名前を冠しているが、国立図書館をはさむ道の名前にこの二人を選んだのは、パリが社会科学を大切にしている姿勢を象徴しているといえるだろう。

EHESSへ通うメトロの駅に隣接する売店では、バカンス中の有名な男女の写真が表紙を飾るゴシップ誌に並んで、アーレント、スピノザなどを特集する哲学の雑誌が目立つ一角を占めていた。人文社会科学が「実践」としてパリの多くの人々(もちろん、その数は限られているだろうが、駅の売店で売るだけの市場規模はある)の中で位置づけられていることを示唆する光景だった。

滞りが終わりに近づいた時期には、通勤で使ったバスやメトロが断続的に運休した。労働法改正の反対を訴えて続いた激しいデモの余波であった。つとに知られる通り、こうしたデモはパリでは珍しいものでは

ない。人々は運休を平然と受け止めていた。

社会の問題について強い関心を抱き、しばしば積極的な行動にでるパリの人々の姿勢がはたしてよりよい解決策を導くのか、それはわからない。フランスのエリート主義、啓蒙主義の姿勢、宗教的不寛容への違和感を覚えたこともあった。社会科学における学際的な接近方法が優れた成果を生み出していくのか、それもわからない。無秩序な寄せ集めに終わるのではないかという疑問を感じたこともあった。ただ、人々が社会の問題に対して傍観することなく強い関心を持ち、行動につなげていくという姿勢、そして社会科学が細分化、専門化、高度化に向かいがちな流れに抗いながら大きな観点から現実を分析する努力を粘り強く続けるという姿勢に学ぶべきことは多いはずだ。大きな問題について考えなくてはいけない局面にあって、それはなおさらである。

学術的に妥当性の高い研究成果を生むためには、専門化、細分化、高度化しながら中範囲の議論に専念するのがよいだろう。大きな議論ができるのはごく少数の傑出した研究者だけだろう。それらを認めた上でなお、経営学を生業とする者として、より大きな社会の問題との関係を念頭に置き、そこへの意味(論文には明示せずとも)考えながら研究を行っていきたいと思うようになった。これが、社会の問題についての人々の関心や行動が消極的な国(丸山真男のいう「である」社会)で過ごし、専門を共有する限られたコミュニティ(丸山真男のいう「タコツボ」)の中で仕事をしてきた私にとって、テロのあったパリに滞在したことの意味となった。